2025年2月16日　説教「岩の上に建てられた家」

ルカの福音書6章39～49節

平地の説教の鍵となるお言葉は「あなたの敵を愛しなさい」でありましたが、その関連で二回にわたって学んできました。今朝の箇所はこの説教の結びにいたる部分です。

１．偽善者たちのすること（39～42節）

①盲人が盲人の手引き（39）**「イエスはまた一つのたとえを話された。『いったい盲人に盲人の手引きができるでしょうか。ふたりとも穴に落ち込まないでしょうか。』」**

イエスはさらにたとえによって教えられます。「一つの」とありますが、いくつかのたとえがこの後に出てきます。第一のたとえは、盲人による盲人の手引きです。盲人の指導者が後進を育てることはどの時代にもあります。ここでは、目が見えない人が見える道の案内をすることはできないということです。そのまま進めば、穴に落ちてしまうかもしれないからです。

②弟子は師以上には（40）**「弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。』**

生徒は教師から教えられることを基本に考えます。そこで、容易なことでは教師の考え方を越えることはしにくいです。もちろん、その教師から十分に学ぶに学ぶならば、教師と同じ程度にはなっていくと言われるのです。キリストに教えられた弟子達は最高の教師をもったことになります。

③自分の目にある梁（41～42）**「あなたは兄弟の目にあるちりが見えながら、自分の目にある梁が見えずに、どうして兄弟に、『兄弟。あなたの目のちりを取らして下さい』と言えますか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうしてこそ、兄弟の目のちりがはっきりと見えて、取りのけることが出来るのです。』」**

これは37節において「さばいてはいけません」と言われたことについてのたとえ話です。ちりと梁というのは、極端な違いがあります。しかし、それは人間の罪の実態です。自分の梁ほどの罪は脇におき、相手のちりほどの罪をあげつらうというのは、外から見れば一目瞭然でも本人は気が付かないのです。自分で梁を取りのけるとは、それに気が付くこと、そしてそれを是正することは困難ですから、義なる神にそれを願うことです。

２．憐み深い方にならい（43～45節）

①悪い実、良い実（43）**「悪い実を結ぶ良い木はないし、良い実を結ぶ悪い木もありません。」**

たとえは続きます。主イエスは自然にたとえをとることがよくあります。「わたしはぶどうの木」であはじまるヨハネ15章はその典型でしょう。そこではキリストにつながっていれば、実を結ぶことが教えられていますが、ここではキリスト以外につながっていて、良い実が結ぶかという問い掛けでもあります。良い実は良い木から、悪い実は悪い木からなるのです。

②いばらからいちじくは（44）**「木はどれでも、その実によってわかるもの**

です。いばらからいちじくは取れず、野ばらからぶどうを集めることはできません。」

木のたとえ話は別の説明へと発展します。つまり、実を見ればその木がわかるということです。ここでは、いちじくの実といばら、ぶどうの実と野ばらを並べています。いちじくの実とぶどうの実を良い実とし、それらはいばらや野ばらからは実らないことを言われているのです。

③心の良い倉と悪い倉（45）**「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」**

そのたとえ話は具体的な人の事へと結びつけられていきます。良い人というのはキリストにつながり御霊に導かれて歩む人でしょう。その人はその御霊に下さる実を外に示し、逆にキリストにつながらず悪霊に従う者は、その実として悪い実を表すというのです。マルコの福音書 7 章 20 節以下では、生まれながらの人の内側から出てくるものは、「悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさ」であることをイエスは語っています。

３．さばかず、赦し、与えよ（46～49 節）

①みことばを行う人（46～47）**「なぜわたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。」**

ここからは、平地の説教のまとめの部分です。言葉の上で『主よ、主よ』と呼んだからといって、必ずしも内側に信仰の実がやどっているとは限らないということです。もしキリストとつながっているなら、外側にも御霊の実である「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」（ガラテヤ 5:22－23）が現れ、具体的行動にもそれが表れてくるというのです。

②地面を深く掘り下げ（48）**「その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。」**

イエスの言葉を聞いてそれを行う人について、もうひとたびたとえが示されます。それは地面を深く掘って、辿り着いた堅い岩を土台として、その上に家を建てる人だというのです。そのような家であれば、洪水が来たり、川の水が来ても流されることなく、立ち続けるというのです。

③土台なしの家（49）**「聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひといものになるのです。」**

逆にイエスの言葉を聞いても実行しない人というのは、土台のない砂の上に建てられた家のようだというのです。その家は、勢いある水がやってくれば倒れてしまうのです（マタイ7:26～27）。

《結論》

今朝の聖書箇所から三つのことを考えさせられた。

第一に、39 節の「いった盲人に盲人の手引きができるでしょうか。」とある部分です。私自身が、霊的に盲目であるにもかかわらず、牧師、説教者ととして正しくない導きをしているのではないかと、胸にずきっとささる感じでした。わかっているつもりで、全くわかっていない者が、伝道などできないのではと思わされたのです。そのままならば、二人とも穴に落ち込んでしまうという事態になりかねません。まさに、主が言われるように、偽善者ではないかとも心に迫ってきます。そんな時に、「それじゃ、誰がやるんだい？」という先輩牧師の言葉が思い出されました。そして、改めて確信することは、どんなに貧しい者であっても、聖書が神の御言葉であることは変わらないということです。であれば、祈りつつ、恐れをもって、この御言葉を解き明かしていくことではないかということです。また、多くの兄姉から祈っていただいていることも感じています。霊的な目が明けられて、御言葉を伝えていくことができるように、お祈りいただきたいと思います。

第二に、41～42 節に出て来る、自分の目のなかにある梁の問題です。私達はどうして、自分のなかにあるそんなに大きな問題に気づかないのでしょうか。これは、イエス・キリストの誇張的表現なのでしょう。いやそうではなく、本当に私達は自分の大問題に気づかないでいるのではないでしょうか。ある人は言うでしょう。「そんなに突き詰めてもしょうがないのでは」と。かつて、あの創世記のヤコブの子ヨセフの兄弟たちが、食糧を求めにエジプトに行った時に、何十年ぶりかにヨセフに再会した時、それが自分達の兄弟であるヨセフだとは気づきませんでした。しかし、何度かヨセフのところに通ううちに、かつて自分たちがヨセフを隊商達に売ったことについて心が疼き始めました。しかし、それでもなかなか目の前のエジプトの総理大臣がヨセフだとはわかりませんでした。しかし、ついにヨセフが兄弟たちに自分が誰であるかを知らせた時に、彼らは自分達の大きな罪と、とてつもないことをなさる神を知っていったのでした。あなたもどこかで、心が疼いていませんか。そこにこそ、あなたの問題が潜んでいるのです。祈っていきましょう。

第三に、岩の上に建てた家と土台なしで家を建てた人のことです。御言葉を聞いて行う人が岩の上に家を建てた人だと主イエスは言われます。御言葉を行うというのは、実際的には二つの面があります。一つは、神の前に出ることです。行動になってないように思えますが、根本的な行動です。まずは礼拝をささげることです。そこからすべてが始まります。礼拝には主の御言葉を実行する内容が幾重にも含まれています。祈り、賛美、御言葉、献身、交わりといった重要課題が礼拝の中にあるのです。その上に立って、私達は荒野に出ていくのです。そして、隣人への愛のわざをさせていただくのです。教会の宣教も、礼拝が中心にしっかりと据えられて、進むのでなければ、岩の上に建てた家にはなりません。主の御言葉を皆で心を合わせて実行していこうではありませんか。